

野田 九条通信

2010年10月号

No.58

「野田・九条の会」事務局

TEL 7122-0502

野田九条の会ホームページ
http://www17.ocn.ne.jp/~art.9/

野田九条の会講演会講師は 鴨桃代さん・全国ユニオン会長

日時 11月23日(火・祝) 午後
場所 野田市中央公民館 講堂
賛同金 500円

野田・九条の会は、毎年秋に憲法に関する講演会を企画し、アピールを出してきました。今年は厳しい労働環境の中、一人でもはいれる労働組合、全国ユニオン（全国コミューニティ・ユニオン連合会の略称）の会長、鴨桃代さん（習志野市在住）に、非正規労働者の実態や解決の道、憲法九条とのかかわりなど暮らしの視点からのお話を聞きた

とを考えています。

鴨さんは労働組合のない会社に働く人、パートや派遣・契約社員なども入れる労働組合、なのはなユニオン（事務所・千葉市）創設以来の委員長です。その後同種労働組の全国組織である全国ユニオンの会長として2005年、連合の会長選挙に立候補。全く小さな規模の組合にもかかわらず得票数の3分の1を得て話題



今月の九条の会

10月9日(土) 午後2時~4時半
けやきのホール4階研修室

前半1時間は「平頂山事件と撫順戦犯管理所」のDVD鑑賞も含めた学習会をします。(詳しくは裏面) ぜひご参加ください。

九条への想い

南京大虐殺はなかったと言う声が大きくなっている。事実はどうだったのか？当事者は高齢で数少なくなっている。しかも被害者の方は思い出すだけでも辛い。それを加害国の人間に面と向かって話をするには大きな抵抗がある。そんな困難を乗り越え信頼を得てインタヴューがなされ、記録された。記

録した小柄な女性の何というパワー、持続力！身近な人が大勢殺され、女性は幼い子も大勢に押さえつけられて何

度通つても会つてもらえない人も多かつたとか。

一方、加害者の方はどううか？こちらの方が証

映画「南京・引き裂かれた記憶」を観て

野田南地域九条の会 村上和子

人にも犯された。その体に残った後遺症も大きい。それが以上に心に残った傷は今も癒えることなく、日本人と聞くだけで震えが来る人、何

言を得るのは難しいだろうと思つたら実はそうではなかつた。その時期に南京あたりにいた旧日本軍兵に話を聴く。最初はそんなことは「聞

される、女は皆犯される」と言つたのは自分たちがそうしてきたからだつたのだ。

家族思いの優しい人間が戦地では虐殺、レイプに走る。人間の尊厳は省みられない。

できるだけ大勢の人にこの事実を知ってもらいたい、共感を得てもら

「九条への想い」への400字程度の原稿をお待ちしています。



野田・九条の会に入いませんか

戦争の放棄をうたっている憲法九条を守る輪を広げるために、多くの方に呼びかけます。

野田・九条の会は、大江健三郎さんや故井上ひさしさんらにより「憲法を守るという一点で手をつなぎ一ひとりが出来る努力をいまずぐ始めよう」と発足した「九条の会」の呼びかけに賛同し、2005年、野田で「憲法九条を守る」この一点で集まった市民の集まりです。

月一回の定例会、署名活動やチウシマキ、講演会や学習会、戦跡見学などを行っています。自由な集まりですので、それぞれの条件にあったスタイルで参加しています。活動経費は一口500円の賛同金と寄付によって運営しています。この趣旨に賛同される方、ぜひ仲間になってください。毎月発行のこの「野田・九条通信」をお届けします。

お申込みは、お近くの会員が事務局(田中 7122-0502)まで。カンパも常時受け付けています。

10月9日(土) 2時~4時半 櫛のホール4階研修室 例会前半に学習会 ぜひご参加ください。
平頂山(へいちょうざん)事件

レポーター: 皆川純磨

1932年9月16日、現在の中国遼寧省北部(瀋陽の東45キロ)において、撫順炭鉱を警備する日本軍の撫順守備隊(井上小隊)がゲリラ掃討作戦をおこなった際に、楊柏堡村付近の平頂山集落の住民が多く殺傷された事件。犠牲者数については、400~800人(田辺敏雄による説)や3,000人(中国説)など諸説があるが、掃討作戦およびそれに伴う民間人犠牲者の存在自体に異議を唱える論者は存在しない。

この事件は終戦後間もなく国民政府の戦犯法廷で裁かれたが、実行者はそれ以前に他の地域に移動していたので、当時現地にいた炭鉱関係の民間人11名が逮捕され、うち7名に死刑が執行された。日本では、1971年に本多勝一が朝日新聞に連載した「中国の旅」で、この事件が取り上げられ広く知られるようになった。この後事件の生存者3名が日本政府に国家賠償を求めて提訴したが、2006年5月、最高裁は国家無答責の原則により原告の上告を棄却、結審した。現在、事件の地には平頂山殉難同胞遺骨館が建てられ館員は次のように説明している。「ここには300メートル位の長さに3000人が眠っています。その内の80メートルをこのように発掘して遺骨館にしました。」その80メートルには800体の遺骨がむき出しで広がっている。

撫順(ぶじゅん)戦犯管理所

1950年ソ連より中華人民共和国に戦争犯罪人として引き渡された969人と、中国国内から移送された13人の合計982人の日本人戦犯や満州国の戦犯を収容した所。満州国戦犯の中では有名な愛新覚羅溥儀もいる。彼らはこの場所で、中国の人道的処遇(基本は「罪を恨んで人を恨まず、人を戒め人を救う」)により人間的良心を回復したといい、「撫順の奇蹟」と呼ばれている。大半の日本人は起訴免除で釈放され1956年に帰国。全員が帰国したのは1959年。第2次大戦の戦犯を連合国が裁いた39の軍事法廷で、死刑判決・無期懲役を1人も出さずに全員釈放されたのはこの法廷だけ。帰国した元戦犯は「中国共産党に洗脳された人達」とマスコミから攻撃され、良い仕事に就けなかった人が多いという。そういう中でも戦犯管理所での強い反省から、中国帰還者連絡会(略称: 中帰連)をつくり反戦平和と日中友好の実践を続けた。この中帰連は進む高齢化のため2002年に解散されるが、その灯を消してはならないと、解散と同時に若い人たちが「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」を立ち上げ運動を続けている。